

ゲストティーチャー授業の質を高める授業デザイン
の開発：
社会と子どもたちをつなげる授業を目指して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 公開日: 2013-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, まゆ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007277

ゲストティーチャー授業の質を高める授業デザインの開発

—社会と子どもたちをつなげる授業を目指して—

小川 まゆ

Designing Effective Guest Teacher Programs:

Bringing Real World Learning into Classrooms for Children

Mayu OGAWA

1 問題の所在

現在、総合的な学習の時間を中心に、各教科や道徳でもゲストティーチャーを活用した実践が数多くみられる。前川（2011）は「ふだん学習している内容が日常生活にかかわっていることや、その分野の最先端ではどのような研究がなされているのかなど、学校の教師が説明するよりも、仕事などで日常にかかわっている人から直接子どもたちに話してもらうことが効果的な場面がある」と述べ、ゲストを呼んで授業することが、学校の勉強と日常生活の結びつきを知るためにも重要であると述べている。

しかし、近年の国際調査において、学校の勉強が日常生活に役立つという認識が日本は低いという結果が出ている。TIMSS2007 によると、「数学を学習する重要性の意識」について、「数学を勉強すると、日常生活に役立つ」という問い合わせに対して、中学2年生の肯定の割合は、71%となり、国際平均値の90%よりも19ポイント下回り、韓国に次いで低い。また、理科においても、肯定が53%となり、国際平均の84%より31ポイントも下回っている。ベネッセの実施した国際6都市の、「勉強の効用」に関する意識調査においても、「学校の勉強はどれくらい役立つと思いますか」という質問に対し、日本(東京)は「社会で役に立つ人になるため」などのほとんどの項目で、「役に立つ」と答える小学生の比率が他都市の小学生と比べてもっとも低くなっている。

したがって学校現場では、子どもたちを取り巻く社会や地域で生きる大人たちとの出会いというのが、一つ大事なことだと考える。そのためには、教科学習、総合的な学習の時間、道徳の時間、特別活動などを通じてゲストティーチャーと出会う場を大切にしていきたいと考えた。

藤川ら（2009）の全国公立中学校理科教諭を対象にした「ゲストティーチャーを招く場合、何が問題だと思いますか？」という調査では、一番に「学習単元の位置づけ（34%）」、次いで、「説明内容が難しい（22%）」という結果がでている。筆者が静岡市スペシャリスト派遣事業の担当者に行ったヒアリング調査においても、「年度の計画が出来てからの申し込みになるので、教科とのつながりや単元内でのつながりを作りにくい」という課題や、「伝えたいことが多いため、情報量が多くなってしまう」という課題があがった。さらに、平野（2007）におけるアンケート調査で、授業がほとんどゲストティーチャー任せであるという回答が対象の4割近いことが明らかになっている。

本研究では、学習単元への位置づけと、情報量が多く説明内容が難しいという二点を、重点的な課題と置きつつ、「教師」という立場から、課題を解決する方法を考えていく必要があると考えた。

2 研究の概要

ゲストティーチャーを活用したモデル授業開発を行うため、連携協力校の6年部の先生と話し合いながら、どの単元の、どのような位置づけでゲストティーチャーを取り入れたらより効果的かを話し合いながら、研究を進めた。

今回ゲストティーチャーを活用した授業の一覧と、各授業で筆者が介入できた活動の状況をまとめたのが、表1の通りである。

表1 ゲストティーチャーを活用したモデル授業の提案と実施状況

提案事項	①茶道 室町文化 社会科	②留学生 外国から見た日本 総合	③ものづくり ものづくりの情熱 総合	④エスパルス サッカーと算数 算数
事前事後活動	○	○	○	○
授業デザインの工夫	×	○	×	○

3 茶道体験教室（社会科）

9月に連携協力校にて、ゲストティーチャーによる茶道体験教室が行われた。社会科「室町文化」の単元の終末での実施となった。

授業実施前に、室町文化について調べる時間を取り、子どもたちは茶道を中心にいくつかの文化の調べ学習を行った。そこでは、茶道について形式的な先行知識を得ていた児童が多くいたが、十分な調べだったとは言えなかった。そのため、能動的に参加する意欲を高めることを意図して、事前シートを実施し、改めて自分で課題を持ち、本時の茶道体験を行った。また、講師とは口頭や冊子で双方のねらいを把握した。授業の流れは、自己紹介と思いやりについての話から始まり、授業のほとんどは茶道体験であった。ここで筆者の主な介入としては、前述したように事前シートの実施を行った。（図1）

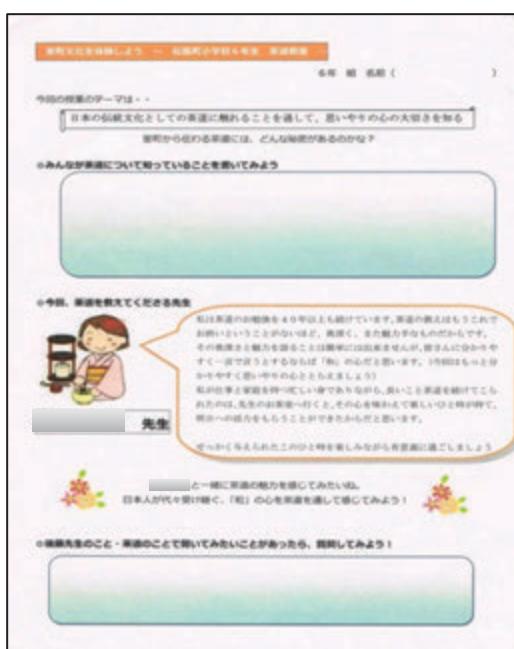


図1 茶道教室事前シート

事前シートのポイントは4つである。

一つめは、事前に講師の経歴等を把握しておくために、このシートにメッセージとして記載した。塩田（2010）は、ゲストによる授業づくりで気をつけたいポイントとして『なんか偉そうな人が来てしゃべったな』とならないよう講師の紹介は丁寧にしたい」と述べ、講師紹介の大切さを重視している。二つめは、自分自身が今茶道について知っていることを記述する欄を設けたことである。ここには、自分が今知っている知識を記述するため、事後に行った振り返りシートとの対比をすることができる。三つめは、質問記入のコーナーを設けたことである。ここには、自分が既有知識や、講師の経歴から聞きたいことを記述する。このことにより、能動的に子どもたちが参加することへもつながっていくことを意

図とした。四つめのポイントは、朝の会などの短い時間で実施できることである。

以上の四つのポイントを踏まえて作成したシートについて、授業後児童にアンケートを取った。事前シートに対し、「とても役に立った」「少し役に立った」と肯定的回答を示した児童が9割

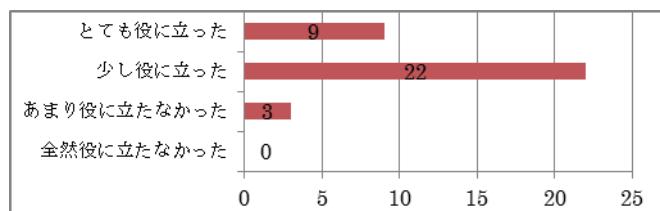


図2 事前ワークシートは、授業の理解に役立ちましたか？(36名中)

らです」という記述があった。今回は質問を書く欄があったにも関わらず、授業の進行上の関係で質問時間が確保できなかった。したがって子どもがあらかじめ用意してきた質問をやり取りできる十分な時間を設ける必要性が明らかになった。

また、本授業の課題点として「社会科という単元の意識づけ」が残った。授業後の感想には、茶道体験そのものについての記述がほとんどで、社会科「室町文化」とのつながりを意識した感想が少なかった。したがって、ただ単元に位置づいていればいいのではなく、社会科「室町文化」に位置づいているという認識を持ってもらう工夫が必要だったと考える。そのため、次に行った留学生の授業では、前時までの活動を振り返るスライドを設けて授業を行った。

4 外国からみた日本人（総合的な学習の時間）

連携協力校にて総合的な学習の時間「日本人としての生き方」を探究する単元と一緒に受け持たせてもらい、二度ゲストティーチャーを呼ぶ機会があった。一回目は、日本人の特性を考える中で、「外国から見た日本人」を知るために、中国からの留学生を講師に呼んで授業を行った。筆者は、講師と直接二回打ち合わせをし、授業を一緒につくることができた。そこで、一方的な講師の講話ではなく、適宜子どもたち

が能動的に参加できるような場の設定などの工夫を行った。また、講師から最初提示された「日本人のすごい所」は10項目を超えていたため、4つのポイントに分けて授業を進めるように情報を精選した(図3)。授業後の感想、「分かったこと」のカテゴリーの中では、この4つのポイントがそれぞれ表出し多様化しなかったことから、情報が多岐に渡らず精選した効果があったと言える(図4)。さらに、事前までの授業とのつながりで、「日本人のイメージの変容」に関する記述が多く見られ、茶道の授業の際の課題点であった「単元内という意識づけ」がされていたことを示す結果になった。

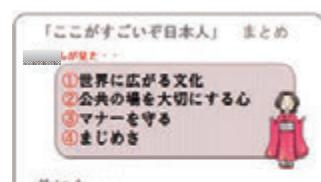


図3 授業のまとめスライド

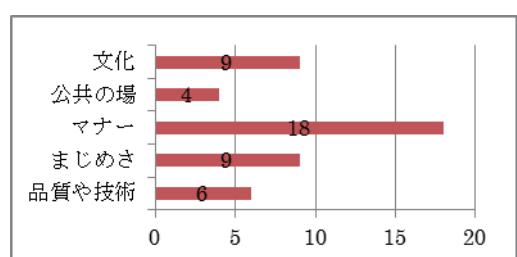


図4 留学生との授業を通して分かったこと(41名中)

5 先人に学ぶものづくりへの情熱（総合的な学習の時間）

総合的な学習の単元の後半では、活躍している日本人と実際に出会うという機会があった。そこでは、東京在住の講師を呼ぶこととなつたため、メールにて何度か打ち合わせをして授業を行つた。ものづくりという難しい内容であったため、事前に講師が出演するDVDで事前学習をした。

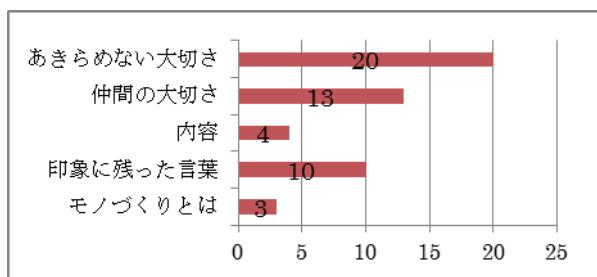


図5 ものづくりの授業を通して分かつたこと (41名中)

したがつて、本時もデジタルカメラができるまでという小学生にとっては比較的難しい内容ではあったのだが、講師のねらいに沿つた「あきらめない大切さ」「仲間の大切さ」といった感想が、分かつたこととして半数近くの子どももあげていた(図5)。授業後の教諭たちの第一声も「事前学習やつておいてよかったです」というものであり、事前に本時の内容を簡単に把握しておくことで、専門的な話の理解を助けるということが分かつた。さらに、ものづくりへの情熱を語ってくれた講師に対して、子どもたちからは多くの憧れを記述した感想が見られ、出会いそのものの価値が表れていた。

6 エスパルスドリーム教室をはじめとするNPOでの実践

筆者は昨年度から二年間静岡市内で「エスパルスドリーム教室」実践を行つた。サッカーを題材とした算数、理科などの授業を静岡市内の小学校で実践する取り組みである。講師の「凄さ」と子どもたちが出会う場の設定、教科の学習の中でもキャリア教育を扱うなどの工夫を行つてゐる。また、指導案の配布を募集前に行つことで、単元に位置づけて行えるようにしてゐる。さらに、タブレットPCを使った算数(速さ)の事前学習のパッケージ化の開発も行い、実施した。

「iPad 実施校(連携協力校)」、「事前シートのみ実施校」、事前学習を何も行つていない「昨年度実施校」で、事前活動の影響を分析するために、授業後に行った質問紙調査にて、分散分析を行つた。その結果、「授業の楽しさ」、「みはじの計算の分かりやすさ」、「ゲストの想いが伝わつたか」について、「iPad 実施校と昨年度実施校」、「事前シートのみ実施校と昨年度実施校」の間で、有意な交互作用がみられた。(それぞれ $F(2,253)=25.92, p<0.01$; $F(2,253)=23.78, p<0.01$; $F(2,253)=36.32, p<0.01$) しかし、「iPad 実施校と事前シートのみ実施校」においては有意差が見られず、質問紙の「将来自分が望む仕事につくために算数の勉強が必要だと思いますか?」「算数の勉強はサッカーと関係があると思いますか?」の項目にも主効果はなかつた。

以上の結果から、事前学習は「授業そのものの楽しさ」や、「計算の分かりやすさ」など、ゲストが来校し算数の授業を楽しくやることについて影響を及ぼしていることが考えられる。さらに、「ゲストの熱意」の部分にも iPad や事前シートによる事前学習を実施した学校と昨年度実施校で交互作用がみされることから、事前にゲストのことについて知つてゐた方が、よりゲストとの出会いに効果があると考えられる。

「社会と算数のつながり」について聞いた質問紙の2項目については、有意な交互作用が見られなかつた。したがつて、本授業を通して伝えたかった算数の有用性の部分については、事前学習よりも授業内容の改善が求められるだろう。本授業内に留まらず社会・文化を発展させる力や態度を身につける授業づくりをさらに進めていく必要があるだろう。

7 授業比較分析

本研究で実践した4つの実践を、質的・量的に分析を行った。

まず、単元に位置づけた効果について示す。茶道、エスパルスの授業は単元の終末部、留学生、ものづくりの授業は単元の展開部に位置づけて行った。授業後の感想に、事前学習を含む本時までの学習についての記述の共起関係をテキストマイニングにて分析した。結果、茶道とものづくりの授業には、事前までの学習とのつながりを顕著に表すものではなく、ほとんどが本時のみに関わるものであった。一方で、留学生の授業では「日本のイメージの変容」、エスパルスでは「算数とのつながり」が見られ、事前までの学習とのつながりが共起した。さらに、「事前までの学習のつながり」についてどれくらいの児童が記述したか、量的にも分析できたエスパルス以外の3つの実践を図6に示す。留学生の授業のみ、半数の児童が「本時までの学習のつながり」について記述し、その他はそれに満たない結果になった。このことから、「単元に位置づけ、事前学習も行った」だけではその効果が見られないということになる。したがって、事前学習を単に行うだけでなく、授業内へ結びつけることが必要なことが分かる。効果的な事前学習と、授業への架け橋をつくることによって、本時までの学習を活かすことができるのではないか。それが、単発になりがちなゲストティーチャー授業への改善策へとつながっていくだろう。

表2 カテゴリー数内訳

	授業内容数	感想出現数
留学生	4	4
ものづくり	10	5
エスパルス	4	4

次に情報精選の効果について述べる。体験が主であった茶道は、授業内で新たに獲得された情報の記述がほとんど見られなかった。留学生、ものづくり、エスパルスの授業内で話されたカテゴリー、感想で表れたカテゴリーは表2の通りである。ものづくりの授業では、話したもの全てが出現することはなかった。したがって、情報を精選していくことが子どもに感想に残りやすくなることが分かる。しかし、講師があらかじめコンテンツとして持っていて、情報の精選が無理な場合もあるので、質問時や導入時をはじめとする「教師の意図的な介入」が重要となるだろう。

さらに、4つの授業を分析していくと、「授業内容そのものの」「ゲストの出会い」「尊敬」「ねらいとは違う部分での学び」など授業により多様なカテゴリーがあった。このことから、ゲストと授業をデザインしていく上では、多様なねらいを持つことが必要だと考えた。例えば、授業内容を超えたゲストティーチャーの感情面や人柄にふれた感想は図7のように、茶道の授業以外では見られた。したがって、多様なねらいを視野にいれた授業デザインが求められてくることが明らかになった。

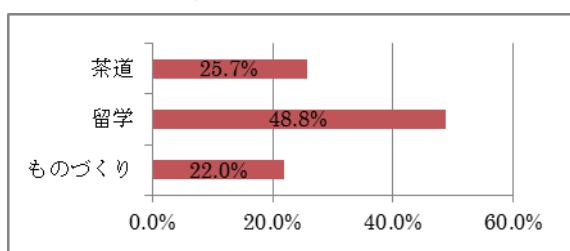


図6 「本時までの学習とのつながり」についての記述割合

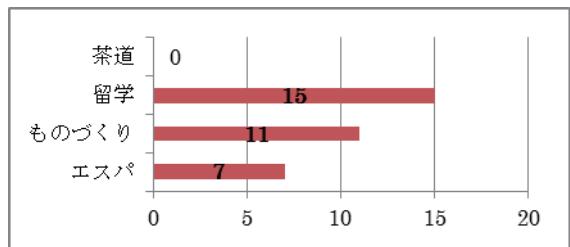


図7 「ゲストティーチャーについて」の記述人数 (41名中)

8 成果と課題

まず、事前活動がゲストティーチャーの授業に効果を及ぼすことが分かった。事前シートなどの配布などは、単元の位置づけに関わらず最小限行っていきたいことと言える。しかし、ただ事前に学習すればいいのではなく、事前までに学習したことと、ゲストティーチャー当日の授業が「つながっている」という認識を子どもたちに持たせることが重要ではないかという課題が出てきた。そのために、留学生の授業で行ったような、授業冒頭の振り返りなどを取り入れていきたい。

情報はあらかじめゲストティーチャーと精選できることが望ましいが、それが出来ない場合は、事前授業が大切になってくることが分かった。加えて、教師が講師に意図的質問をするなどで単元に基づいた情報を子どもたちに与えるなどの工夫が必要なことが分かった。さらに、子どもとゲストティーチャーが双方にやりとりできる場の設定や、多様なねらいを視野にいれることによって、多くの子どもたちにとって、有意義なものになることが分かった。本研究を通して得られた成果は、ゲストティーチャーを活かすも活かさないも教師の介入次第であるということだ。ゲストの伝えたい願いと子どもの実態にあった介入を積極的に行っていきたい。

課題は、「教師の明確な立ち位置」があげられる。留学生とエスパルスの授業は、TT という形で授業を行ったため、教師が進行役という明確な位置づけがあり大変コントロールしやすい形で進められた。しかし、ゲストティーチャーがもともと持っているコンテンツを利用した実践を行った、茶道とともにづくりの実践では、事前事後への働きかけは行うことができたものの、授業内そのものに教師が介入するのは困難であり、教師の立ち位置が見えないまま終わってしまった。筆者はただゲストティーチャーを呼んできただけの役割になってしまったのである。また、ものづくりの授業において、「子どもたちに立ち止まって考える活動を設けてほしい」という要望は講師にとって難しく実施できなかった。後に、これは「専門家に専門外の要求をしている」という指摘があった。これらのことから、事前に進行などを任せてもらうような打ち合わせや、教師が主導でねらいに近づいていく時間の確保など、教師側から講師への働きかけが求められたと考えられる。ただし、講師の伝えたいことを切ってしまわないように意識していかなければならない。

さらに、「事前シートの工夫」も課題である。事前シートを行ったことは効果があったが、さらに工夫が求められると考えられる。たとえば、あらかじめ事前シートで子どもに発問をなげかけておいて、それが授業を通して分かるなどの、授業内容とシートの結びつきを強くできたら、さらに効果があるのではないかと感じた。また、クイズなどを載せるなどにより「楽しみ」になる授業へつなげていきたい。今回事前学習として、多様な実践を行ってきた。これから実践では、さらに工夫をした事前学習を行っていきたい。

参考文献

- 塩田真吾「ゲストティーチャーと授業をつくろう」『月刊ホームルーム』35巻第11号、2010年、p6-9
藤川大祐、塩田真吾、石川清香「中学校理科における外部講師を招いた授業の試み」千葉大学教育学部研究紀要第57巻、2009年、p1-9
平野朝久「総合的学習におけるいわゆるゲストティーチャーの役割と課題(1)」、東京学芸大学紀要総合教育科学系第58集、2007年、p23-31
前川哲也「ゲストティーチャーを呼ばう」『理科の教育』60号、2011年、p64